



教育研究施設「畜産フィールド科学センター」内の育成舎

同大で製造する「畜大牛乳」(1000ml)、「畜大低温殺菌牛乳」(500ml)とアイスクリーム



酪農・畜産科訪問 No.2 帯広畜産大学別科

専門的な学校が多数存在する。今回は、日本の食料基地・十勝という絶好のロケーションで酪農・畜産の神髄を教え、農業後継者や農業・農家を支援する人材育成を行う帯広畜産大学別科を紹介する。



左から早坂浩希さん、和田大輔講師、内田芽依さん

地域の指導者となる農業後継者を育てる

帯広畜産大学別科（草地畜産研修）

獣医畜産に関する高度な知識と技能を有する人材を育成する帯広畜産大学。同大学に、昭和35年に設置された別科（草地畜産研修）は「地域の指導者となる農業後継者を育てる」ことが目的。別科担当の和田大輔講師は「本科では将来、農村に残り、わが国の食料を自分の手で生産すると決意した若者に対し、2年間、酪農・畜産を中心とした基礎教育をみつちりと行います」と説明する。

現在、1年次に17人、2年次に16人の学生が在籍。講義は「家畜繁殖学」「農業経営学」などの座学はもちろん、「家畜繁殖学実習」「農業機械整備実習」「牛剖蹄実習」など実習活動が多いのが特徴だ。こうした学内での講義・実習に加え、1年次には農家に3週間泊まり込んで現場の知識と技術を学ぶ「夏季農家実習」、2年次には2~3人が1チームになり、酪農現場で実際に起きている諸問題を取り上げて体感できたのが良かった」と充実した2年間を振り返った。その

研究」などを実施。常に現場目線を意識した講義・実習を行っている。希望者は家畜人工授精師（牛）や認定牛剖蹄師の資格も取得できる。

札幌市出身の早坂浩希さん

（別科2年）は「食料生産は命をいただきこと。自然の偉大さや動物の命の尊さを実感できることが酪農の魅力」と語るとともに、「修了後は新規就農も考えたが、現実はなかなか厳しいのが実態。4月からは本学で学んだ知識や技術を生かし、上士幌町農協で地域の農家の皆さんを微力ながらサポートしたい」と目前を輝かせた。

一方、十勝管内本別町の酪農

家に生まれた内田芽依さん（別科2年）は「別科は就学期間が2年と短いが、帯広畜産大学の専任教員陣の講義を受けられるのが大きなメリット。特に人工授精にかかる授業では、実際に牛を使つた実習を通して身をもつて体感できたのが良かった」と充実した2年間を振り返った。その



「ISO22000」認証施設の10頭ダブルのミルキングパーラー

上で「実家では大規模酪農を経営しているが、私は家族の手で牛を牛らしく自然に飼う酪農が理想。遠い将来（就農）のことはまだ分からないが、えんゆう農協への就職が決まつたので、農家の皆さんのお役に立てるよう一生懸命頑張りたい」と笑顔を浮かべた。